

## 大地を渡って風はふく

菅 木志雄

関根伸夫の「位相大地」(1968年)という作品は、スケールの大きい良い作品であった。どうしてあのようなものをつくることになったか、いちいちせんさくしてもしょうがないことであるが、〈作品〉が眼前にあるかどうか、どんな場合でも先行するのはいいことである。キッカケの大もとはやはり斎藤義重の教えを受けていたことがはじまりであると思われる。それは、わたしなども同様であるが、斎藤さんの時代の動向を見る力は、若い作家にとって、荒海の中の光であった。その光を見れるかどうかは、そばにいる者に才能があるかどうかであるが、その意味で、関根伸夫は、行くべき方向をしっかりと見ていたとおもわれる。

わたしは気になっている作品がもうひとつある。それは油土を使用したものである。ただ無雑作に油土を積み上げたものであったが、わたしはこれを見て、〈わかっているなあ〉と思ったものである。ただそれを発展していくプロセスがなく、もったいない気がしていた。あのときの〈もの〉への感覚はシャープであった。が、わたしはふと思ったのだが、〈もの〉をつくっていくには、人間が優しすぎる感じがしたことである。

斎藤教室で、同じ空気を吸い、同じ光をあびて、時代を走る様を見れたのは幸運であった。

2020年4月